

神頼み

渡部 一郎^{*1}
Watabe Ichiro

11月下旬の土曜日。雲一つない青空に誘われて、鎌倉の有名な紅葉スポットである獅子舞に出かけた。私の住んでいる横浜市栄区は横浜市の南西に位置しており、鎌倉市に隣接する緑豊かな場所である。鎌倉市の中心まで直線距離で約3km。人によっては陸の孤島ともいっているが、それほど不便を感じたことはない。獅子舞までは自宅から歩いて45分位で、いったん天園まで上った後、獅子舞まで急な斜面を降りて行く。途中、私の貧相なイメージでは獅子には見えない「獅子岩」を通り過ぎると、突然きらきらと輝く真っ赤なカエデが目に入ってきた。周りには多くの観光客がいたが、皆一斉に歓声をあげていた。普段はあまり感動などしなくなってきたが、本当にきれいな紅葉だった。獅子舞の由来を調べると「黄門様こと水戸光圀が鎌倉ガイドの元祖ともいえる新編鎌倉志を1685年に編纂した際に、山の嶺に獅子の形をした岩があることから地元で“二階堂の獅子舞の峯”と呼ばれていた地を獅子舞と名づけた。」とあった。運動不足の体に鞭を打って、来ただけの価値はあった。

自宅が鎌倉に近いこともあり、昔は鎌倉アルプスとも呼ばれる天園ハイキングコースを中心に、よく歩いた。天園ハイキングコースは鎌倉北部の外周を巡る全長約4kmのハイキングコースだ。それというのも、2003年から2006年までの間、青森県の下北半島にある東北電力株式会社東通原子力発

電所建設工事で単身赴任をしたのだが、この間の不摂生が原因でBMIが25を超えるほどになってしまい、その対策としてウォーキングを始めた。最初は、自宅からハイキングコースの入口まで約15分間の往復さえ厳しかったが、段々と距離を伸ばし、最終的には3時間位平気で歩けるようになった。鎌倉アルプスのハイキングコースには色々なコースがあり、その日の気分でコースを選択できる。

天園⇒今泉台分岐⇒大王岩⇒半僧坊

天園⇒今泉台分岐⇒覚園寺⇒鎌倉宮

天園⇒天台山 ⇒瑞泉寺（最も急で長い）

天園⇒獅子舞 ⇒鎌倉宮

単身赴任から帰って調達の仕事についていたのだが、傍で見ると、楽な仕事ではなかった。単純な方程式では解けない問題に加えて景気が上向いたことで物が買えない時期であったこともあり、ストレスを蓄積していた。そんな時、週末のウォーキングは、とても良いストレスの発散につながった。やせることを目的に始めたウォーキングだったので、周りの景色を眺めながら散策することはなく、何も考えずに足元だけを見てひたすら前に進む。無心で歩くことで、いつのまにかストレスが軽減していた。精神的には座禅や瞑想と同じなのであろうが、体を動かす分、より良い気がする。ゴルフもストレス解消には有効なのだろうが、私の場合邪念が入るのでストレス解消には適していない。この時期、ウォーキングが趣味といえるほ

*1：取締役 検査事業部長

ど熱中していたが、シンガポールの関係会社への出向により、この趣味は封印となった。

鎌倉には神社仏閣が多く点在し、お参りする機会も多い。横浜工場勤務の時は、職長さんたちとの新年安全祈願が恒例行事だった。北鎌倉駅に集合し、以下のルートで無事故無災害を祈願した。

⇒明月院横を抜けハイキングコースへ

⇒勝上獄展望台まで厳しい上り下りが続く

⇒展望台から鎌倉市街の絶景を一望

⇒半僧坊を経由し、一気に建長寺本堂まで下る

⇒トンネルを抜けて鶴岡八幡宮で安全祈願

⇒小町通りで宴会のための食料確保

⇒銭洗い弁天横を抜け源氏山公園へ、大宴会

残念ながら、工場長時代に無事故無災害はかなえられなかった。皆で多少騒ぎすぎたのが原因だったのかも知れないが、工場幹部と職長さんたちの意思疎通には有効だった。この安全祈願は、今でも続いていると思う。

さて、話は少し変わるが、シンガポールにいた時に、休日を利用してカンボジアにあるアンコール・ワット観光に出かけた。アンコール・ワットは世界遺産であるアンコール遺跡群を代表するヒンドゥー教寺院建築である。12世紀前半にアンコール王朝によって30年を超える歳月を費やして建立され、その後16世紀半ばに仏教寺院に改修されている。境内は外周を東西1,500m、南北1,300m、幅190mの濠で囲まれ、その中に三重の回廊に囲まれて五つの祠堂がそびえる。中央の第三回廊は一辺60mで、四隅と中央には須弥山を模した祠堂がそびえ、本堂となる中央の祠堂は65mの高さである。夜明け前に現地に到着し、西門から境内に入り日の出を待つ。アンコール・ワットから昇る日の出は、とても感動的だった。それ以来、東南アジアの寺院に出かけることが多くなった。中でも、インドネシアのジャワ島にあるボロブドゥール遺跡からの日の出やバリ島にある

ウルワツ寺院の夕焼けは圧巻であった。どこに行っても感心するのは、現地ガイドの日本語がうまいことで、彼、彼女らのほとんどは日本に来たことすらない。自分の英語力を考えると、毎回やる気の差を感じてしまう。

海外の寺院観光は建造物の立派さや、自然の雄大さに感動するのだが、神社への参拝は、日本人の私にとって神秘的な一面を持つ。この年になると、体のあちこちにガタがきていて、何とかパワースポットの恩恵にあずかって健康を維持したい。したがって、最近は神社に行くことが多くなった。

有名などころでは伊勢神宮、出雲大社、弥彦神社、戸隠神社を参拝した。また、三浦半島には走水神社があり、かの有名な小泉一族（小泉純一郎、進次郎）と関係が深い。祠のある山の上からは、東京湾が一望できる。

伊勢神宮は日本一の神社であり正式名称は神宮だ。広大な敷地に内宮と外宮が離れて存在する。内宮の正宮である皇大神宮への参拝では、一般人は拝殿に入ることは許されず、門の外から行うのだが、二礼二拍をした時に、一陣の風が門に飾られた白い布を翻した。神様が門を通り抜けた感じがし、慌てて願いごとをして一礼をした。神宮には式年遷宮のあった翌年に行ったので、建物は非常にきれいな状態だった。式年遷宮とは20年に一度、東と西に並ぶ宮地を改めて、古例のままにご社殿や御装束神宝をはじめ全てを新しくしておおみかみにお遷りいただくお祭りである。つまり、東と西に同じ土地を準備しておき、20年ごとに建物一式を交互に建て替える。その理由についての明確な根拠は残されていないが、結果的に、式年遷宮が20年ごとに行われてきたことで、唯一神明造という特殊な建築技術や御装束神宝などの調度品を現在に伝えることができている。優秀な技術伝承方法だと思う。どこの企業でも技術伝承に苦勞しているが、これだけ計画的に技術伝承を

行うシステムは羨ましい。ただ、一般企業にはここまで余裕はない。

今まで参拝した神社の中で、最も神秘性を感じたのは、長野県にある戸隠神社の奥社である。戸隠神社は霊山・戸隠山の麓に、奥社・中社・宝光社・九頭龍社・火之御子社の五社からなる、創建以来2000年余りに及ぶ神社であるが、奥社は五社の中で最も高い位置にある。奥社までの参道は約2kmで、中ほどには萱葺きの赤い随神門があり、その先は天然記念物に指定されている樹齢400年を超える杉並木が続いている。随神門は結界であり、門からのぞいた一本道の参道は、神の世界へつながる感じでまさに神秘的だ(写真1参照)。平安時代末には修験道の道場として都にまで知られた霊場だったこともあり、奥社までの後半の上りはきつかった。往復で1時間半近く歩いて参拝を終えすがすがしい気分となったが、お腹が減ったので、大鳥居の傍にあるそば屋でそばを食べた。戸隠のそばはうまかった。

さて、自宅でこの原稿を執筆中に、ふと本棚を見ると「成功している人は、なぜ神社に行くのか?」というタイトルが目に入った。著者は科学者なのだが、この手の本は科学的な証明もできないだけにうさん臭いものが多い。読んだ記憶もなかったもので、ページを開いてみると面白いデータがあった。「神社への1年間の参拝回数」と「年収」と「幸福度」との関係についてのアンケート調査である。

- ・ 年収が高いほど幸福度は高い
- ・ 参拝回数が多い方が幸福度は高い



写真1 戸隠神社 随神門
(門から奥社への参道が見える)

これ以降の詳細なデータ分析については省略するが、結論は以下である。

- ・ 年に2回は神社に参拝しておけば年収に関係なく1,000万円以上～1,500万円未満の程度には幸せになれる

年収を一気に上げるのは難しいが、神社への参拝は比較的容易なので、試してみる価値はある。

最後になるが、外部環境が激変する中、日々の業務に取り組んでいる皆さんの中には、過度な責任やストレスを感じている人も多いと思う。そんな時は、決して一人で問題を抱えることなく、仲間や上司に相談することだ。仲間や上司に話しにくい時には、徹底的に体をいじめるか、神様に話してみてもどうだろう。

決して信心深くなどない私が、今までに数えきれない位の「神頼み」によって、都度、危機を乗り越えてきたので。



取締役
検査事業部長
渡部 一郎

TEL. 045-791-3523
FAX. 045-791-3547